

韓国語語彙能力テストの開発

林部英雄*・菱沼あい**・李美静***・前川眞一****・内田照久****

Development of Korean Vocabulary Test

Hideo HAYASHIBE・Ai HISHINUMA・Meichin LEE
Shin-ichi MAEKAWA・Teruhisa UCHIDA

1 はじめに

近年、日本国内でも、外国人子弟や帰国子女など、その発達期において言語環境を変えざるを得ない子供の数がますます増加する傾向にあることは周知の通りである。彼らの中には、日本語がほとんど話せないまま公立の小・中学校等に入学または編入してくるものも多い。この場合、否応なく日本語の習得を始めなければならない。

しかし、このように発達途上で習得する言語が変更されるような場合には臨界期 (critical period) の問題を避けて通るわけにはいかない。Lenneberg (1967) は子供の失語症の予後が成人の場合と異なる様相を呈することや生理学的な大脳の構造的成長特性を根拠として、言語習得の臨界期は10代の初期までと主張している。第一言語 (母語) の獲得に関しての臨界期は、脳の可塑性と密接に関係し、生得的に定められた一定の生物学的プロセスが基礎にあり人為的に調節できないものである。ヒトには、生得的に言語の知覚と生成能力が備わっているが、これに加えて臨界期に特定の言語を聞き、それをモデルとして覚え込んで、それに自分の言葉を適合させていく過程が、正常な言語発達には不可欠なものというわけである。

また、その臨界期に相当する小学校時代を一貫した言語環境のもとで過ごせなかった為に、母語を獲得出来ず、抽象概念の発達が未熟なままとなってしまうケース (Double limited: 二言語不十分) もみられる (小野, 1994)。バイリンガル環境で成長すること自体は、第一・第二両言語 (以後L1・L2とする) が共に高度に発達すれば、学力や言語、知能面の発達に支障をきたすことはない。それどころか、メタ言語能力、学力、知力などを促進させる作用もあるとされている (Bialystok, 1984; Bialystok & Ryan, 1985)。しかしながらこれらの結果は最近に至るまで、おしなべて印・欧語族における言語間を前提とした調査によってもたらされたものであった。

アメリカやカナダ等においては古くから多言語教育は盛んであるが、今や日本が単一言

*障害児教育講座

**東急エージェンシー

***横浜国立大学大学院教育学研究科

****大学入試センター研究開発部

語社会だという神話も崩れかかってきている。数十万にもものぼる朝鮮・中国系在日外国人がすでに2世、3世の時代となって存在するのみならず、他国の駐在員子弟や海外で学齢期の一時期を過ごしてきた海外帰国子女らの増加など、日本においても少数言語グループ、及び移住民子弟の言語適応問題が身近なものとして意識されるようになってきている。そこで重要なのは、外国語学習のみならず全ての教科におけるL1とL2の干渉、それらの「言語間の距離」など、正しい知識を踏まえた上での教育であろう（小野，1994）。

言語力は子供の思考や知的発達などに最も関係が深く、かつ環境に強く依存する。子供の学習言語を変更する場合、その両親が子供の年齢と言語発達との関係を十分に考慮し、学習言語の選択、就学学年の選択を行わなければ、子供の自然な発達を阻害する要因になりかねないことから、小学校時代を一貫した言語環境のもとで教育することが肝要なのである（小野・林部，1988）。

韓国語と日本語は同じアルタイ語族に属し、言語構造が近いがゆえに習得が容易であると言われているが、現在までのところ他の言語間における習得の難易と比較した客観的な調査は存在しない。また、もしその事実が確認されたとしても、社会的背景からも両言語併用者が多いことを考えると、Double limitedの発生の可能性があることはまぬがれない。そこで、スクリーニングを兼ねた、標準化された韓国語の言語能力テストの開発は今後の教育現場において、不可欠のものと考えられる。

林部ら（1988）の日本語能力テストに関する研究によれば、小学生を対象として、語彙、漢字、助詞、文型、指示語、前提、含意という様々な側面から調査し、因子分析を行った結果、言語能力は1因子性が高く、語彙力をもってして個人の言語力を代表させることができるという結論が得られている。

そこで本研究は、韓国語についても「語彙」の標準化テストを開発するため、小野ら（1989）が研究開発した日本語力調査に着目し、項目反応理論に基づいて語彙力の尺度を構成することにした。

先行研究として、芝ら（1991）の朝鮮語語彙能力テストがあるが、これは、日本語の語彙理解力テストの項目プールを翻訳して作成したものであるということで、両言語の併用者に対して同時に日本語と韓国語の語彙能力テストの実施を前提としてテストの開発を行う本研究においては、テスト同士が干渉する可能性があり不適切であること、並びに標準化の際の被験者集団の特殊性（被験者全員が在日朝鮮人学校の児童であり、第一言語が日本語であるものが多い）からして、今回、韓国（ソウル）で韓国語が第一言語である話者のデータを収集したことは意義があろう。

2 方法

2・1 テストの開発

韓国語語彙能力テストの作成にあたって、基本的には郭（1996）の中国語語彙能力テストを韓国語に翻訳し、一部は新たに作成した。正答を含む5つの選択肢から成る165項目の語彙問題を設定し、それらを困難度の異なる「低学年用」、「中学年用」、「高学年用」に

分けた。さらにそれぞれにA版とB版を設けたのは被験児への負担が重すぎないようにするためと、被験児の能力を異なる時期に2回推定できるようにするためである。

「低学年用」のA, B版は小学校1, 2年生のレベルに、「中学年用」のA, B版は小学校3, 4年生のレベルに、「高学年用」のA, B版は小学校5, 6年生のレベルに相当するものである。また、「低学年用」は40項目、「中学年用」及び「高学年用」には60項目の問題数を設定した。

以下に項目の例を示す

착수하다	1 알다	2 시작하다
	3 손을 놓다	4 접수하다
	5 입다	

2・2 項目反応理論にもとづくテストの標準化

能力や態度などの特性を測定するためのテストや質問紙は、通常多くの項目によって構成される。それらの項目は、その困難度や測定しようとしている特性との相関の強さなどについて、それぞれ異なる特徴を持っている。たとえば、学力テストなどでは、得点によって学力をあらわすが、テストの中に含まれる問題の難易度によって正答数が変わるため、学力をあらわす得点も変化する。項目反応理論では、各項目に正答する確率を、測定しようとしている特性値の関数としてあらわすことによりそれらの項目の特徴を表現する。これによって、個々のテストの難易度に依存しない尺度で各被験者の学力を推定したり、各項目の特徴を捉えることができるのである。また、テスト得点の理論分布を求めたりすることもできたり、個々の被験者に適した困難度の項目を選んでテストを実施するなど、さまざまな応用が可能となるものである(芝, 1991)。

語彙理解尺度のように子供用から成人用まで広い範囲の年齢の被験者を測定対象とする場合には、発達段階に応じて難易度の異なる複数のテストを用意しなくてはならない。このように複数の版が存在する場合には、各版ごとに項目パラメタ値の推定が実施されれば、各版に含まれる項目パラメタは原点と単位の異なる尺度上の値で表され、版間で相互に比較することが出来ない。版間で相互に比較できるようにするためには、すべての項目パラメタ値をそれが属する版に関わらず、共通の原点と単位を持つ共通尺度上で表さなければならない。このような尺度を得るには等化(equating)と呼ばれる処理が行われなければならないが、そのためには等化すべき尺度で、尺度値が既知である被験者が存在するか、または、隣接する尺度の両方で項目パラメタ値が既知である項目が存在するかのいずれかの条件が満たされなければならない(芝, 1991)。被験者に負担がかかるようなすべてのテストを同一の被験者集団に実施することは不可能なので、隣接するテスト間に共通の項目が含まれるようなデザインを本研究に取り入れて、項目配列がなされた(Table 1)。

たとえば、「低学年用」のA版は、a, b, c, d, e, fの項目群から成り、そのうちa項

目群は「低学年用」のB版と共通している項目群であり、b項目群は「低学年用」のB版及び「中学年用」のA版と共通、d項目群は「中学年用」のA版と共通している項目群であることを示し、f項目群はどの版とも共通していない項目群であることを示している。

Table 1 項目配列

version		共通項目群	非共通項目群
low	A	a b c d e	f
	B	a b c g h	i
mid	A	b d g j k l	m
	B	c e h j k n	o
hi	A	k l n p	q
	B	k l n p	r

Table 2 項目群を構成する項目

項目群	項目番号 [Item No.]	項目数
a	1. 2. 3. 4. 7. 10. 12. 17. 18. 20. 21. 22. 23	13
b	6. 8. 14. 16. 37	5
c	27. 33	2
d	19. 31. 32	3
e	26. 28. 30. 34. 35. 36. 38. 39. 40	9
f	5. 9. 11. 13. 15. 19. 24. 25	8
g	47. 52. 53. 54. 56. 59. 60	7
h	49. 50. 55. 57	4
i	41. 42. 43. 44. 45. 46. 48. 51. 58	9
j	63. 64. 65. 66. 68. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 79. 80. 83. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 95. 97	22
k	84. 85. 92. 98. 100. 103. 104. 105	8
l	82. 93. 94. 99. 101. 102	6
m	61. 62. 67. 69. 70. 71. 78. 81. 96	9
n	116. 118. 119	3
o	106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 117	11
p	120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 157. 158. 159. 160. 161. 162	40
q	154. 155. 156	3
r	163. 164. 165	3

aの項目群は、項目番号1. 2. 3. 4. 7. 10. 12. 17. 18. 20. 21. 22. 23. の計13項目から成っていることが示される。

a~rの項目群の内訳についてはTable 2の通りである。

2・3 テストの実施

対象児は、ソウル市内の小学校普通学級に在籍する、第1学年から第6学年までの2,725人の児童である。なお、今回の調査は1996年9月に実施したものである。各学年の被験児数は以下の通りである。

小学校1年生	429名	
2年生	463名	
3年生	456名	
4年生	427名	
5年生	473名	
6年生	477名	計 2725名

実施にあたって、本研究における調査は、児童の学力を比較するものではなく、普通学級の児童の言葉に関する平均的な知識を求め、各学年ごとの語彙理解能力の指標を算出しようというものであることを各小学校の学校長、担当の教師などに説明し、協力を要請した。

各版の項目はそれぞれ1冊に印刷され、担当の教師のもとでクラスごとに実施された。実施する際、統制を維持するために、担当の教師に対して次の事項について注意を払ってもらうよう要請した。

- ・事前に、一冊ごと交互に混ぜておいたA版とB版の問題冊子をそのまま配布すること。
- ・開始前に五肢選択の回答方法を説明すること。
- ・検査結果に時間制限の要因が加わらないようにするために、十分な時間（通常の1コマの授業時間、40分程度）で調査を実施すること。

問題冊子は実施後ただちに回収され、パソコンによるデータ入力の後、既製のプログラム BILOG を用いた統計処理を行った。

2・4 結果

2・4・1 パラメタの算出および比較

Table 3・Table 4に示す項目の日本語訳については次の通りである。

・ 건조하다	: 乾燥した	[Item No. 6]
・ 동창	: 同窓	[Item No. 84]
・ 실패하다	: 失敗する	[Item No. 10]
・ 고의	: 高い志	[Item No. 105]
・ 난처하다	: 困る	[Item No. 118]

Table 3における比較は、学年が高くなるにつれ正答率も高くなることを示し、Table 4における比較は、同学年であれば各版ともA-B版間に大差はなく、正答率の変化は学年に拠るものであるということを示す。

Table 3 学年別正答率

Item No.	grade	ratio	version
[6] 건조하다	1 年 生	21%	低学年用-A
	2 年 生	29%	低学年用-A
	3 年 生	43%	中学年用-A
	4 年 生	60%	中学年用-A
[84] 동창	3 年 生	12%	中学年用-B
	4 年 生	30%	中学年用-B
	5 年 生	40%	高学年用-B
	6 年 生	60%	高学年用-B

Table 4 各学年におけるA, B版の正答率

Item No.	grade	ratio	version
[10] 실패하다	1 年 生	66%	低学年用-A
	1 年 生	63%	低学年用-B
	2 年 生	89%	低学年用-A
	2 年 生	88%	低学年用-B
[105] 고의	3 年 生	19%	中学年用-A
	3 年 生	21%	中学年用-B
	4 年 生	43%	中学年用-A
	4 年 生	42%	中学年用-B
[118] 난처하다	5 年 生	60%	高学年用-A
	5 年 生	63%	高学年用-B
	6 年 生	71%	高学年用-A
	6 年 生	71%	高学年用-B

等化の後、能力パラメタは、全12グループにおける平均が0、分散が1という尺度で算出された。この尺度での各グループの能力値の平均値及び境界値を Table 5 に示す。境界値については、隣接する各学年の平均能力値からさらに平均値を求め、算出した。

このパラメタに基づいて、テストの得点から被験児の語彙力について推定することが出来る (Figure 1)。図の縦軸はテストの得点を表わし、横軸は韓国語語彙力を表わす。たとえば中学年用のA版のテストの場合、得点が21点であった被験児の語彙能力は小学校3年生レベルであり、得点が35点であった被験児の語彙能力は小学校5年生レベルであること等がグラフから読みとった値を Table 5 に位置づけることによって知ることができる。各項目のパラメタはTable 6 に示した通りである。

Table 5 能力パラメタの平均値及び境界値

versionA			versionB		
grade	average	boundary	grade	average	boundary
1	-1.19		1	-1.17	
		-0.93			-0.88
2	-0.68		2	-0.58	
		-0.49			-0.44
3	-0.30		3	-0.30	
		-0.10			-0.12
4	0.11		4	0.06	
		0.45			0.44
5	0.79		5	0.82	
		1.01			1.02
6	1.23		6	1.23	

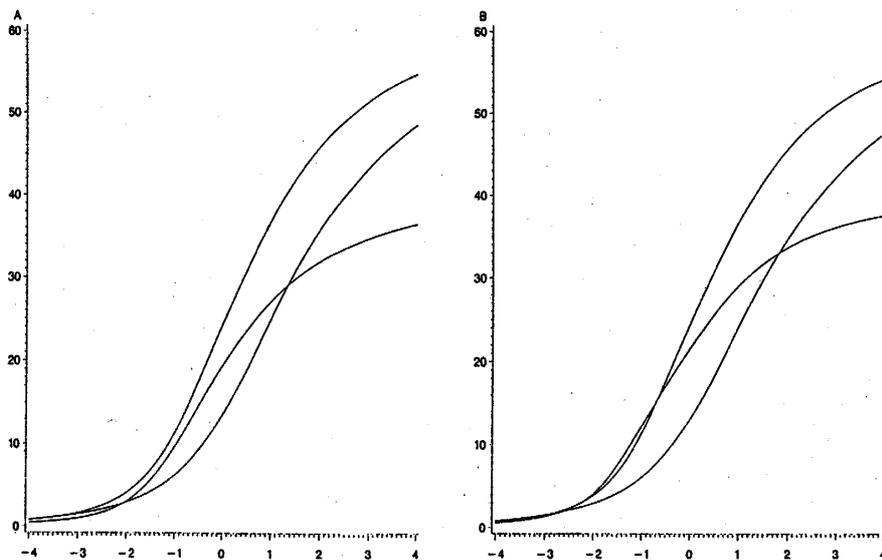


Figure 1 語彙力推定曲線

Table 6 等化尺度上における項目パラメタ

ITEM	識別度	困難度	ITEM	識別度	困難度	ITEM	識別度	困難度
1	0.4187	0.3347	56	0.7385	-0.2923	111	0.4029	0.9975
2	0.706	0.1627	57	1.0794	-0.9802	112	0.4941	2.1721
3	0.7697	0.7109	58	0.655	-0.6653	113	0.2745	4.466
4	1.7256	-1.1908	59	0.6062	0.4756	114	1.0036	-0.3879
5	0.843	-0.187	60	0.3658	1.4628	115	0.7288	0.0314
6	0.9105	-0.0682	61	0.1874	4.461	116	0.4257	1.8435
7	0.854	-0.13	62	1.3055	-0.2455	117	0.7619	0.1603
8	1.0096	-1.3144	63	0.5431	0.6783	118	0.806	0.4062
9	0.8358	-0.7146	64	0.7231	0.3833	119	0.2305	3.0936
10	1.6442	-1.51	65	0.6564	0.8015	120	0.5713	0.2819
11	0.4445	1.4664	66	1.7526	-0.8304	121	1.0071	0.7708
12	0.5802	0.5354	67	0.3708	1.2381	122	0.2578	3.2729
13	0.6598	0.0712	68	0.4944	1.0876	123	0.2844	-0.2544
14	0.347	2.1014	69	0.6555	-0.175	124	0.3111	3.071
15	0.8649	0.2497	70	0.2971	2.887	125	0.3793	2.4454
16	1.0866	-0.7606	71	0.9904	-0.9319	126	0.4202	0.1632
17	0.2048	4.8354	72	1.4017	-0.9757	127	0.2979	3.7194
18	0.6678	0.7708	73	0.3789	2.0529	128	1.1475	0.569
19	0.8914	-0.5915	74	0.2735	2.5945	129	0.4544	3.3479
20	0.857	-0.2507	75	0.4173	1.1333	130	0.4423	1.8172
21	1.0319	-0.4468	76	1.404	-0.7586	131	0.9184	1.9235
22	1.0306	0.1503	77	0.7055	1.2075	132	0.4051	3.3641
23	0.4739	1.1275	78	0.7937	-0.8893	133	0.2699	2.2618
24	0.2908	3.3667	79	0.746	0.9133	134	0.6406	1.2153
25	0.7833	0.2694	80	0.8816	0.1651	135	0.334	3.8379
26	1.2246	-1.0175	81	0.7359	-0.0023	136	0.4176	1.8979
27	0.6391	0.3166	82	0.5354	1.6622	137	0.6555	1.5551
28	0.7355	0.8947	83	0.6265	-0.3997	138	0.2853	4.9261
29	0.2813	2.1652	84	0.8132	1.0486	139	0.5616	2.0706
30	0.291	3.6267	85	0.4302	1.4413	140	0.8369	0.4977
31	0.3803	1.082	86	0.4786	0.7111	141	0.547	-0.5563
32	1.4658	-0.6672	87	0.7416	0.1482	142	0.8077	1.3747
33	0.3892	4.2325	88	0.4131	1.2763	143	0.3624	3.1768
34	0.965	-0.419	89	0.7806	0.8179	144	0.8807	1.0178
35	1.814	-0.7476	90	1.0901	0.4677	145	0.9116	0.0605
36	0.5095	1.3158	91	0.251	2.3718	146	0.2853	2.8074
37	0.294	2.0403	92	0.5248	1.4343	147	0.5839	1.3254
38	0.8621	0.2227	93	0.3239	2.0755	148	0.3842	1.3216
39	0.625	1.1089	94	0.3491	4.0522	149	1.1317	0.3199
40	1.3915	-0.8088	95	1.2525	-0.0085	150	0.3491	5.088
41	0.66	0.119	96	0.7946	0.7381	151	0.3102	4.099
42	2.0689	-1.5105	97	0.7424	0.5542	152	0.5225	1.8468
43	0.8194	-0.1602	98	1.605	-0.5356	153	0.4096	2.7366
44	0.6646	-0.6896	99	0.4843	1.2339	154	0.5568	1.5945
45	1.6207	-1.4874	100	0.7023	1.5426	155	0.2944	3.875
46	1.3489	-1.1274	101	0.3395	1.616	156	0.8533	0.1247
47	0.6471	1.7336	102	0.7624	0.5145	157	0.2111	6.6259
48	0.3475	0.6767	103	0.9292	0.8773	158	1.5769	1.158
49	0.388	-0.1881	104	0.8516	0.6238	159	1.6082	0.7729
50	0.5919	-0.2729	105	1.2654	0.2319	160	0.5025	2.0699
51	0.6852	0.328	106	0.7373	-0.6718	161	0.8957	0.7613
52	0.7859	-0.492	107	0.5779	1.9442	162	0.2779	6.0574
53	1.1678	0.6921	108	1.2924	-0.8834	163	0.4681	2.9931
54	1.5718	-0.7954	109	0.3156	1.0904	164	0.2809	5.7096
55	0.7145	-0.8681	110	0.6853	1.1135	165	0.2662	4.1809

2・5 項目の精選

この韓国語語彙テストを今後の教育現場においてさらに利用しやすく整えるために、問題項目を精選することが望ましいと考えられる。については「低学年用」、「中学年用」、「高学年用」をそれぞれ30項目程度に絞るにあたって、留意した点は次の通りである。

- 1) 正答率が学年に応じて高くなっていること。また、易しすぎたり難しすぎたりしないこと。
- 2) 全体的に正答率の高い児童のほうが、項目の正答率も高いこと。また、各選択肢への反応に極端な偏りがみられないこと。
- 3) 項目特性曲線の傾斜がある程度あること。(識別力の値がある程度以上大きいこと。)

以上のような分析結果を参考にして項目選択を行なった (Table 7)。

Table 7 標準化テストの項目

	Item No.
low	4. 8. 9. 10. 16. 19. 21. 26. 32. 34. 35. 40. 42. 44. 45. 46. 52. 54. 55. 57. 58. 66. 71. 72. 76. 78. 98. 106. 108. 141
mid	1. 6. 20. 21. 34. 43. 49. 50. 52. 56. 83. 95. 98. 102. 104. 105. 114. 118. 120. 121. 123. 126. 128. 140. 141. 145. 149. 156. 159. 161
hi	1. 82. 84. 85. 99. 101. 102. 103. 104. 105. 118. 120. 121. 126. 128. 130. 133. 134. 137. 140. 142. 144. 147. 148. 149. 154. 156. 158. 159. 161

3 まとめ

165項目の韓国語語彙テストを韓国(ソウル)で実施し、それらのデータを項目反応理論によって分析し、正答率、識別度、困難度を求め、項目プールを得た。項目反応理論とは、テスト項目に対する被験者の反応と潜在的な特性(能力)との関係を記述する数学モデルと、モデルに基づき、テスト項目の特徴や被験者の潜在特性をデータから推論する手法の集成である。

当初の165項目から、上記の正答率、識別度、困難度を総合的に考慮し、71項目に精選した。それらを韓国語語彙能力テストの標準化問題として「低学年用」「中学年用」「高学年用」各30項目ずつ配分した。問題精選後の正答率は、「低学年用」「中学年用」「高学年用」のいずれにおいても53パーセント前後と推定される。

4 謝辞

本研究の問題作成，韓国でのデータ収集にあたって，韓国教育部 国際教育振興院の金栄春先生，金相敏先生には，大変なお力添えをいただきました。また，実際にテストを実施させていただいた，ソウル市立倉兪小学校，忘憂小学校の校長先生をはじめとする諸先生方，児童の皆様の貢献に対して深く感謝いたします。

本研究に関する問い合わせは，

〒240 横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-2

横浜国立大学教育人間科学部

林部英雄

e-mail: deo@ed.ynu.ac.jp

までお願いいたします。

5 文献

Bialystok, E. 1984

Influences of bilingualism on metalinguistic development. Paper presented at the symposium 'Language awareness/reading development: Cause? Effect? Concomitance?' at the National Reading Conference Meeting, St. Petersburg, Florida.

Bialystok, E. and Ryan, E. B. 1985

Metacognitive framework for the development of first and second language skills. In D. L. MacKinnon and T. G. Waller (eds.) *Meta-Cognition, Cognition, and Human Performance*. Academic Press.

林部英雄・繁榊算男・市川雅教・牧野泰美・小野 博 1988

日本語力の多元的評価の試み. 日本教育心理学会 第30回大会論文集.

郭 津均 1996

中国語語彙テストの開発とその応用. 横浜国立大学教育学研究科修士論文.

Lenneberg, E. H. 1967

Biological Foundations of Language. Wiley.

小野 博 1994

バイリンガルの科学 —どうすればなれるのか—. 講談社.

小野 博 1989

小,中学生における日本語力の発達の調査. 日本音響学会誌, 45, 178-185.

小野 博・林部 英雄 1988

海外帰国子女の大学生における日本語,英語語彙力. 特殊教育研究施設報告(東京学芸大学), 37, 1-8.

芝 祐順 1991

項目反応理論 —基礎と応用—. 東京大学出版会.